



WASEDA University
早稲田大学

早稲田大学 スチューデントダイバーシティセンター GS センター 活動報告書

第 5 号

2022 年 4 月

目次

はじめに	2
1 GS センターについて	3
2 年間の活動	6
3 学外活動について	15
4 年間利用者数および利用目的	16
5 相談件数および相談内容	20
6 今年度の課題と今後の展望	23
7 学生スタッフの声	25
おわりに	30

2021 年度

はじめに

GSセンター課長 野口 純世

2017年4月、早稲田大学GSセンター(Gender and Sexuality Center)は、学生からの提案を契機に、学生支援に主眼をおいた多様性を推進する機関として、他大学に先駆けて設置されました。開室以来、LGBTQ+（性的マイノリティなど。以下、LGBTQ+）学生のみならず、ALLY（アライ：理解者・支援者）となりたい学生、イベントや図書資料等を通して知識を得ようとする学生等、実に様々な目的で多くの学生が来室し、利用者数は右肩上がりに増えていく中、2020年度、新型コロナウイルスにより、世の中の「日常」が大きく変わり、これまで賑わいをみせていた本センターの様子も一変しました。しかし、学生の声を受け止め、届いた学生の声を形にするための本センターの活動は何も変わりませんでした。本センターは、新たな「日常」の中のLGBTQ+学生へ目を向け、いち早く、オンラインによる相談やイベントを実施したり、本センターを積極的に広報するなどして、職員と学生スタッフが一丸となって、LGBTQ+学生への支援を途切れることなく実施しました。

2021年度を迎え、本センターは5年目に突入しました。あらためて、スチューデントダイバーシティセンターの一員としての自覚を持ち、いかにしてGSセンターが「LGBTQ+学生や、ジェンダー・セクシュアリティに関心のある全ての人々（アライ含む）の居場所であり、誰もが自由に利用できるセーフ/リソースセンター」としての役目を果たせるか、職員・学生スタッフは常に考え、工夫して、活動しました。2021年度の相談件数やオンラインイベントの参加者数は、その成果かもしれません。また、本センター職員・学生スタッフを中心となって、時間を掛け、丁寧にコンテンツを整えていた「ALLY 養成研修」が、学内関係箇所の連携により、ついに職員を対象に実現できたことはたいへん大きな成果です。

本センターは、今後も、学生の声を聴き、受け止め、一歩ずつ、確実に、誰もが“多様な性”の中の一員として豊かな学生生活が送れるキャンパスづくりを推進し、そして学生の多様性を支援するためのあるべき姿を追い続け、多くの学生に愛されるセンターを目指します。

最後になりますが、この活動報告書がLGBTQ+の方々への支援を始めようとしている多くの教育機関、企業、公共団体等の皆様方の目に止まり、それぞれの活動において、多様性を支援するための一助になれば幸いです。

1 GSセンターについて

(1) 設立の経緯

早稲田大学は、2032年に創立150周年を迎えるにあたり、「WASEDA VISION 150」という大学の中長期計画を2012年に発表した。その核心戦略のひとつに、「大学の教育・研究への積極的な学生参画の推進」を掲げ、学生参画を促進していく中で、学生が大学に対して、公的に提案を行うべく、「Waseda Vision 150 Student Competition」が毎年開催されることとなった。そこで、『日本初！LGBT学生センターを早稲田に！』と題した企画（チーム名：ダイバーシティ早稲田）が2015年3月の「Waseda Vision 150 Student Competition」にて総長賞を受賞した。これをきっかけに、学内各箇所及びLGBTサークル等が連携し、検討を重ねた結果、2017年4月、早稲田大学にGSセンターが設置された。このようにGSセンターは大学主導で組織されたのではなく、学生の提案により、新しく組織されたことが大きな特徴である。

(2) 組織体制

GSセンターは、早稲田大学学生部の外局である「スチューデントダイバーシティセンター」内のひとつの担当箇所として設置された。学生部ではすでに、ICC（異文化交流センター）と障がい学生支援室が設置されており、学生部内のひとつの担当箇所として活動していた。しかし、GSセンターの設置に伴い、学生の「多様性」を尊重し、学生生活を支援すべく、これらの箇所を統合し、「ダイバーシティ」をキーワードに新たな組織として「スチューデントダイバーシティセンター」が設置された（図1参照）。

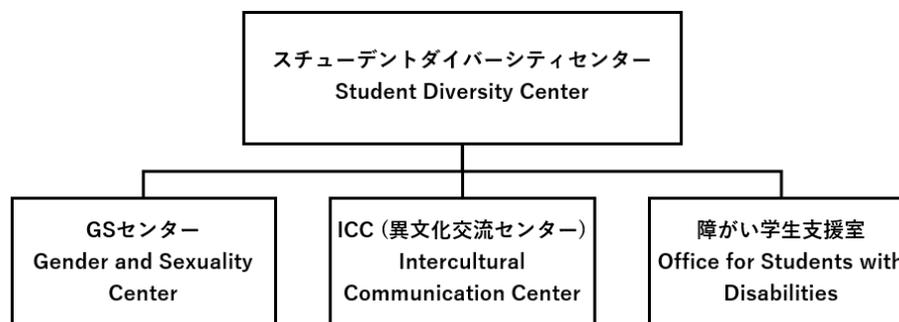


図1 スチューデントダイバーシティセンターの組織図

(3) 設置理念

■ スチューデントダイバーシティセンターの共通理念

早稲田大学は、国籍、エスニシティ、性別（男女だけではない多様な性）、性的指向・性自認、障がいの有無などに関わらず、大学内に多様な個性が共存し、それぞれの目線で学習、教育・研究・就労に関わることにより、大学の更なる進化につながる新たな発想が生まれるようなアカデミック・コミュニティの形成を目指している。そのために、スチューデントダイバーシティセンターでは、次の2つの理念に沿って具体的取り組みを推進していく。

- ・大学生生活全般において不利益を被りうる多様なマイノリティ学生が安心して学業に専念できる学生生活環境の確保
- ・大学に集う全構成員が多様な価値観や生き方を受容するキャンパスづくりの推進

■ GSセンターのミッション

GSセンターは「早稲田大学のLGBTQ+（性的マイノリティなど）学生や、ジェンダー・セクシュアリティに関心のある全ての人々（アライ含む）の居場所であり、誰もが自由に利用できるセーフ/リソースセンター」としている。この点を踏まえ、図2に示した4つを軸とする活動をミッションに掲げている。これらの円環モデルのもと、学内外に対し幅広い活動を行っていく。

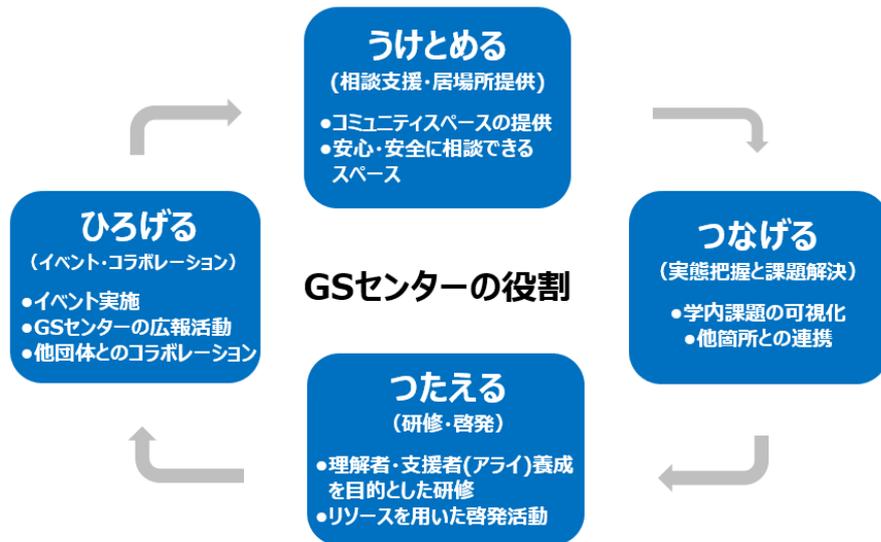


図2. GSセンターのミッション

1. つなげる——相談支援・居場所支援

- ・LGBTQ+学生およびその支援者含めジェンダー・セクシュアリティに関心のある全ての人々の居場所
- ・ジェンダーやセクシュアリティに悩む学生が安心・安全に相談ができるクローズドな相談センター

2. つかむ・おさえる——実態把握と課題解決

- ・相談をベースにした学内の課題の可視化
- ・課題解決をゴールにした他箇所との連携

3. つたえる——イベント・啓発

- ・LGBTQ+への理解者・支援者（アライ）の養成を目的としたイベントの実施（テーマトーク、ランチ会、読書会、LGBTQ+就活・就労交流会など）
- ・GSセンターにあるリソース（書籍、DVD、スタッフなど）を活用した学生・教職員への啓発活動

4. ひろげる——認知度向上

- ・HPやSNSツールを用いたリアルタイム広報
- ・登録制のGSセンターメンバーシップ（メールマガジン）の配信
- ・NPO等団体、教育機関、民間企業、サークルなど学内外機関・団体とのコラボレーションイベント

(4) 勤務体制・サポート内容

■ GSセンターの勤務体制

2021年度は、ジェンダー・セクシュアリティに関する知識のある専門職員（常勤嘱託1名と非常勤嘱託1名）と専任職員（管理職1名、学生生活課との兼務2名）、学生スタッフ9名が在籍した。

2021年度の職員の勤務は、感染症対策を強化しながら出校勤務を基本とし、必要に応じて在宅勤務をした。2021年度の業務内容は、表1のようになっている。

表1 2021年度コロナ禍におけるGSセンタースタッフの業務内容

	業務内容
専門職員	相談対応、オンラインイベント企画・運営、学生スタッフイベントのアドバイス・補佐、教職員に対する専門的な研修・コンサルテーション、他箇所との連携業務、センター内リソースの拡充・管理、その他GSセンターに関する運営業務など
専任職員	他箇所との連携業務、学内外へのGSセンターの活動紹介、職員勉強会の運営、その他GSセンターに関する運営業務など
学生スタッフ	利用者対応、オンラインイベント企画運営、GSセンターの広報活動、その他GSセンター業務に関すること

■ GSセンターのサポート内容

職員の守秘義務のもと、相談者のプライバシーが守られた空間で以下のサポートを行う。また、個々人のニーズに応じて、学内・学外の適切な機関をご紹介します。可能な範囲で連携しサポートする。

- | |
|--|
| <ul style="list-style-type: none">・ジェンダー・セクシュアリティに関する疑問や質問に、可能な限り回答する。・学生生活で感じた違和感や心配事などについて可能な範囲で聞く。 |
|--|

【相談の例】

- ・女性らしさ、男性らしさ、〇〇らしさについて違和感がある
 - ・LGBTQ+に関心があり、何か自分にできることをしたい
 - ・ジェンダーやセクシュアリティ関連のレポートがあり、コメントが欲しい
 - ・友人関係のことで悩みがある
- など

2 年間の活動

(1) イベント

2021 年度も 2020 年度と同様、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、ほとんどのイベントをオンライン形式で実施した。オンライン形式のイベントは 2 年目となるため、スムーズな運営体制を取ることができ、多くの参加者に好評を得た。

表 2 GS センターコラボレーションイベント（大規模イベント）の内容と参加者・最大視聴者数

開催日	イベントタイトル	参加者
8/28	LGBTQ+とピアサポート ゆるく繋がる居場所を見つけて 【主催】GS センター 【開催報告】 https://www.waseda.jp/inst/gscenter/news/2022/01/11/5204/	68 名* (94 名)
11/26	公開講演会「GS センターを知っていますか？」 【主催】ダイバーシティ推進室 【共催】ジェンダー研究所、GS センター 【協力】慶應義塾協生環境推進室 【開催報告】 https://www.waseda.jp/inst/gscenter/news/2022/01/11/5204/	186 名
11/27	ALL ABOUT “THEY”—「X ジェンダー／ノンバイナリー」たちと考えるアイデンティティ、ジェンダー、文化～男女二元論、性別規範、生き方～ 【主催】GS センター 【開催報告】 https://www.waseda.jp/inst/gscenter/news/2022/01/11/5204/	238 名* (410 名)
11/27	こころもカラダも健康な性行為とは～セクシュアルプレジャーの大切さを学ぼう！ ～【主催】シャベル：早稲田で性暴力の根を切る、GS センター 【協力】学生生活課 【開催報告】 https://www.waseda.jp/inst/gscenter/news/2022/01/21/5475/	104 名* (154 名)
12/4	絶対恋愛になる世界 vs 絶対恋愛にならない私—A ロマンティック A セクシュアル— 【主催】GS センター 【開催報告】 https://www.waseda.jp/inst/gscenter/news/2022/01/13/5493/	443 名* (745 名)
12/7	公開講座「トランスジェンダーをめぐる法と社会」 【主催】ダイバーシティ推進室 【協力】GS センター	56 名
合計動員数		1,039 名

※ウェビナー開催のため、最大視聴者数を表記。（ ）内は事前申込者数。

■ 参加者の声（原文より一部抜粋して記載）：

LGBTQ+とピアサポート ゆるく繋がる居場所を見つけて（2021/08/28）

- ・いろいろな団体で活動されている方の話がきけたこと、学びあい、連携の重要性が再確認できたことがありがたかったです。
- ・コロナ禍で大変な中、必要とする人、悩んでいる人などにアクセスできる方法などをそれぞれの活動の中で工夫されていることがよく分かりました。ご尽力、ありがとうございます！コロナ禍になったことで、家から出にくくなった方、連絡・相談しにくくなっていることは、今後の状況の長期化の中では心配なことだと改めて感じました。

- ・プライバシーに慎重に配慮しなければいけないLGBTQの特徴があるなかで、コロナ禍でコミュニティをどう維持していくか/新たに作っていくか、という点について皆様の実践をお聞きできて、大変参考になりました。改めて、コミュニティにどう貢献していくかと考えたとき、三宅さんの「参加するだけでも貢献のひとつ」という言葉が特に印象に残りました。参加することで可視化に貢献できるし、一緒につくっていくひとりになれたらいいなと思います。
- ・大変貴重なお話ありがとうございました。今後取り組んでいきたい者として、「先人を頼る」「続けるために負担が偏らないようにする」など、とても参考になりました。

ALL ABOUT “THEY”―「X ジェンダー／ノンバイナリー」たちと考えるアイデンティティ、ジェンダー、文化～男女二元論、性別規範、生き方～（2021/11/27）

- ・共感することが多く、自分と同様の悩みを持つ方がいるんだ、と思えた。
- ・自分もノンバイナリーを自認しており、X ジェンダーについて知ったように語っていましたが、改めてお話を伺うと新たな視点や発見があり面白かったです。「they」に視座を置いたイベントは初参加でしたが、勉強になりました。
- ・とてもよかったです。なかなか聞くことができないお話を聞かせていただくことができたと感じています。これがお一人だけのお話だと、知識が固定化したり偏ってしまったり 過度に「X ジェンダーとは」という一般化がおきてしまいそうなところ、複数の方のお話やエピソードからどんなふう感じていて、これまで社会や自分とどのように向き合ってきたのかを聞くことができたので とてもためになりました。それぞれの方が悩みながら、どんなことを話そうか 真剣に迷いながら 話してくださっていたのが伝わりました。
- ・みなさんご自身の体験や活動の中からのお話がたくさんあり、たいへん興味深く、また深い学びになりました。特に出産、子育てを経験している X ジェンダーは、なかなかイメージが持たれず、直面する困難も多かったと思いますが、貴重な経験を教えていただき感謝します。生まれたときからでなくとも、またずっと揺れ続けていてもいいのだというメッセージが心強かったです。

絶対恋愛になる世界 vs 絶対恋愛にならない私 -A ロマンティック A セクシュアル-（2021/12/4）

- ・A ロマンティック当事者です。キャンパスの入り口の立て看板で今回のオンラインイベントの告知がされているのを見た瞬間から、嬉しさと心強さを感じていました。イベント内のディスカッションで述べられていたように Aro/Ace も一枚岩ではなくスペクトラム的で、他者を個人化して考えるのが重要ですが、だからこそアライの方も含めその他者が何百人もイベントに集まって「私たち」として話題を共有できたことには大きな意義があると感じました。
- ・A セク・A ロマの当事者として、私自身もこれまで自分で学び考えてきたことがたくさんありましたが、今日平森さんからの学術的なお話や、mina さん、藤彌さんという二人の当事者の方の言葉や経験を聴くことができて、改めて励まされたり、当事者間での差異が多様にあることを深く理解するきっかけになりました。司会進行されていた方の一つ一つの言葉にも、とても安心感や信頼感を覚え、今回このイベントに参加することができて本当によかったと感じました。手話での同時通訳が入っていたことも素晴らしいと思いました。
- ・幅広い考え方、視点が得られたのでとても勉強になった。セクシャリティにかかわらず自分自身を知ること、社会との関わりを知ることの大事さを改めて認識しました。

- ・特に当事者が一番の専門家という言葉に心を救われました。
- ・友達の「彼氏ほしい」が今までさほど共感できなかったが、minaさんのように「そう思うタイプなんだね」という返しをしてみたい。
- ・minaさんの考え方がとてもしっくりきました。セクシャリティは住所のようなものであるというお言葉に共感しました。現在地を示すもの、ということで、変わることが当たり前、必ずしもこれであると決めつけなくていいのだと改めて気づくことができました。また、マジョリティとマイノリティを同じ土俵に立たせるというのは本当に重要であり、私もやっていきたいと思いました。マジョリティが受け入れてあげる側という社会構造になりがちですが、そういうのを取っ払っていくことで、どんどん壁がなくなっていくと思います。

③GSセンター内で実施される小規模イベント

2021年度は、学生スタッフがより自身の関心を深めるようなイベントが実施された。特に、同じ出校勤務日となった学生スタッフ同士が連携し、イベントを実施する場面が多く、出校勤務時の良さを生かす形でイベントを実施することができた（表3参照）。

表3 GSセンター内小規模イベントの内容と参加者数

No	日付	イベントタイトル	参加者
1	4/7	オンラインラウンジ① 【開催報告】 https://note.com/gscenter/n/n57446a66dd8b	7人
2	4/16	GS クィア映画祭～話そう！私を照らしたあの作品～ 【開催報告】 https://note.com/gscenter/n/n9700c1ad2c34	8人
3	4/22	オンラインラウンジ②	7人
4	5/11	オンラインラウンジ③	4人
5	5/21	オンラインラウンジ④	9人
6	5/25	トイレと代名詞だけだと思ふなよ～トランスジェンダーの悩み 【開催報告】 https://note.com/gscenter/n/nf7792b2f6d8b	14人
7	6/2	オンラインラウンジ⑤	7人
8	6/8	オンラインラウンジ⑥「授業を受けていて他の学生の発言にもやったときどうしてる？」 【開催報告】 https://note.com/gscenter/n/n8b2de0c2fe50	6人
9	6/10	Dialogue -GS 哲学- 【開催報告】 https://note.com/gscenter/n/nc7d11b7ae360	8人
10	6/17	オンラインラウンジ⑦	6人
11	6/21	オンラインラウンジ⑧ テーマトーク「ALLYとして実行していること、したいこと」	0人
12	6/28	その理不尽なルールはどこから？ 【開催報告】 https://note.com/gscenter/n/nd2087338c436	7人
13	7/2	学スタ Kokoro&ルーの 台湾&中国生活でみたジェンダー・セクシュアリティ ISSUES 【開催報告】 https://note.com/gscenter/n/n1ce1ca55ad75	10人
14	7/6	オンラインラウンジ⑨	6人
15	7/29	オンラインラウンジ⑩ テーマトーク「2021 春夏学期、嫌だったこと・モヤモヤしたこと総決算会ー流しそうめんの如く、全て流してしまいましょー！！！」	7人
16	8/6	オンラインラウンジ⑪	6人
17	8/17	オンラインラウンジ⑫	0人
18	8/20	2021 オープンキャンパス企画 おいでよ！GSセンター！～早大生と話そう～	8人
19	9/8	オンラインラウンジ⑬	5人

表3 GSセンター内小規模イベントの内容と参加者数（続き）

No	日付	イベントタイトル	参加者
20	9/22	オンラインラウンジ⑭ テーマトーク「みんなでシェアハピ！最近読んだ本、観た映画」	6人
21	9/22	オンラインラウンジ⑮	6人
22	10/6	オンラインラウンジ⑯ テーマトーク「カミングアウトについて話そう！」	10人
23	10/18	オンラインラウンジ⑰	6人
24	10/27	Can you celebrate?～「反婚」「非婚」を考える～ 【開催報告】 https://note.com/gscenter/n/nb1a6c43658c4	9人
25	11/3	オンラインラウンジ⑱	7人
26	11/19	オンラインラウンジ⑲	5人
27	11/26	読書からの一歩 【開催報告】 https://note.com/gscenter/n/n89df0176075b	6人
28	12/6	テーマトーク「宝塚歌劇」 【開催報告】 https://note.com/gscenter/n/nb61cc5701155	11人
29	12/15	オンラインラウンジ⑳	6人
30	12/22	LGBTQ+ & かもしれない人のための就活・就労 【開催報告】 https://note.com/gscenter/n/nf33132ddb45d	21人
31	1/12	テーマトーク「アニメとジェンダー」 【開催報告】 https://note.com/gscenter/n/nceef8308cb02	11人
32	1/18	オンラインラウンジ㉑	5人
33	2/25	フェミたちあつまれ～！！ 【開催報告】 https://note.com/gscenter/n/n867477d5acf1	9人
34	3/8	フェミニストこそ戸籍を知ろうー性同一性障害特例法・夫婦別姓・同性婚ー 【開催報告】 https://note.com/gscenter/n/na536b4beda60	9人
合計参加者数			257名

■ イベント参加者の声（原文より一部抜粋して記載）：

トイレと代名詞だけだと思うなよ～トランスジェンダーの悩み（2021/5/25）

- ・トランスジェンダー当事者の声を聞いて、大変有意義な時間となりました。いい企画が盛り沢山で、駆け足になってしまったことだけが残念です！（泣）
- ・配慮があって聡明な方々の語り口に揺さぶられました。また、ご自分に起こった出来事に誠実に向き合われている方の存在に感銘を受けました。こんな方がいるのか、と思いました。一年以上、ジェンダーやセクシャリティについて考えるのを嫌になって諦めていました。しかし反省し、やっと謙虚になったところにこのイベントにであって幸運でした。内面化した社会の諦念も自分を苦しめます。自分の苦しみを自分で苦しいのだと認められなかったり、存在していると思いついて線をかえられなかったり、やっとなんかすこし社会を対象化しても、その先にも困難があるのだと思いました。違うベクトルの苦しみが相互的に人をおそうので、どうしたら良いのだろうかと思ってしまう。頭がすっきりして沢山言語化しても、言語化できない人の存在を思います。沼にずぶずぶというの、とてもわかります。LGBTQ🏳️🌈で解決する問題とまだしない問題がごったになっていて、面倒なのですね...多分 答えがあるとも思えないものと考え続けるのは虚しいけど考えなきゃいけないのもままならないし考えてしまうし...でも、ずっと息を吸える場所が存在していることに心から感謝しています。ありがとうございました。
- ・ワークショップで参加者の様々な意見を聞き交流したり、当事者のライフヒストリーを直接聞くことができ、充実した時間を過ごせました。今後もこのようなイベントに参加していきたいです。

Can you celebrate?~「反婚」「非婚」を考える～（2021/10/27）

- ・なかなか周りの人と話したことがない話題だったが、同じようにモヤモヤを抱えている人と意見交換できてとても有意義な時間を過ごせた。自分がこれまで勉強してきたこととリンクする内容だったため、積極的に参加できて嬉しかった。
- ・同性婚訴訟から出発して、戸籍制度について、そして結婚を頂点とするような現在の親密な関係のヒエラルキーや規範について、それぞれの言葉やそれぞれの思いを持ち寄り、そしてそれに耳を傾けるという時間を過ごすことができ、とても楽しかったですし、集まれるということは大きなことだなと感じました。婚姻制度が戸籍制度を土台としてできている以上、制度そのものにそもそも、ものすごい差別が乗っかっていて、そこについての話をもっとしたいのに、戸籍上の異性同士が結婚できるように同性同士だって結婚できるようにしてくれという、そこさえ進まずにどうい話をしていけばいいんだろうというもやもやを抱えていました。たとえ、婚姻制度を利用しなかったとしても、すでに私は戸籍制度の中に絡め取られて存在していることは確かで、分籍をしたとしてもそれは一個人として社会に存在していることにはなり得ない、そういう息苦しさを感じます。今回、この企画に参加しなければここまで言語化することもできなかったですし、新たに知りたいと思うことにたくさん出会えました。改めて、このような企画を立ててくれて、ありがとうございました！

LGBTQ+ & かもしれない人のための就活・就労（2020/12/22）

- ・当事者の方々の就活体験談を聞くことができ、これから就活で自分はどんなことを重視したいのか、本当にやりたいことは何なのかを考えるととても良い機会でした。こころもからだも安定しながらも、やりたいことができるような仕事を選び取れるようにコツコツ就活しようと思いました。
- ・当事者の先輩の体験談は中々聞けない大切な話ですが、とても有意義な時間でした。後輩にもおすすめしたいです。
- ・自分もメンタルの調子を崩して学校に通えなかった時期があり、そもそも就活なんてできるのだろうかと不安に思っていたので登壇者の方の経歴や体験談にとっても励まされました。ちょうど尼崎の男性職員がアウトティングされたニュースがあったばかりということもあり未だに先行きは明るいとは言えませんが、LGBTQ+ についての取り組みをしている会社もあると知れたことで少し前向きに考えていくことができそうです。

④GS センターイベントの総括

今年度はコロナ禍 2 年目ということもあり、オンラインイベントを前提に各スタッフが工夫や関心を活かした企画をし、特に学生スタッフが得意な SNS を中心とした情報発信に力を入れた結果、オンラインイベントは GS センター単独では最大の申込者数・参加者数を記録した。これは昨今の LGBTQ+ の中でも周縁化されがちなテーマを取り上げたり、誰にでも分かるような広報文、キャッチーなタイトルにしたことによる効果だと推測できる。また、そうしたテーマの中で活動されてきた著名人をお呼びすることで、GS センターを知らなかった学内外の方への認知度を高めることもできた。今後もこうした一連の流れを通じて、認知度向上や学びの場を提供していきたい。

(2) 学内研修・啓発

例年研修依頼があるが、2021年度はコロナ禍で普及したオンラインでの研修依頼が多く寄せられた。具体的な事例を用いて考えさせることで、身近な案件として受講者側にインパクトを与えることができたと同時に、対応について深く考察し考える受講者の姿にGSセンターもエンパワメントされる機会となった。どの研修でも、抱え込まずお互いに連携をしながら支援していくというスタンスを確認し合うことができた。

■ 職員勉強会の実施（月1開催）

2019年度よりジェンダー・セクシュアリティに関する知識の共有や問題・課題の解決に向けた意見・情報交換、人的ネットワークの形成を目的として、およそ月1回の開催頻度で職員勉強会を実施している。参加者は有志の職員で、その回の当番が興味関心のあるテーマについて、発表とディスカッションを行っている（表4参照）。毎回テーマは異なり、各参加者がそれぞれ関わっている業務内容や関心も多様なため議論も活発に行われている。

表4 2021年度の活動内容と参加者数

日付	テーマ	参加者数
2021/4/30	GS 新入職員懇親会	12名
2021/5/27	GSセンター開室から現在までの変化	16名
2021/6/30	アンコンシャス・バイアス（無意識の偏見）	9名
2021/7/28	日本の漫画が描くLGBTQ	9名
2021/8/26	早稲田大学のダイバーシティ推進のいまとみらい	6名
2021/9/28	オリパラとジェンダー・セクシュアリティ	9名
2021/10/28	「小さな要望」にどう向き合うか	9名
2021/11/31	セクシュアルマイノリティといかに接点をもつか	6名
2021/12/27	"女性"と"性的少数者"は共闘できるか	7名
2022/1/31	おじさんだって正直、しんどい ～私が感じてきた生きづらさ、そして男性学の可能性	10名
2022/3/3	映画を観て、想うこと。～「偏見」について、想うこと。～	6名
合計参加者数		99名

■ 社会科学部新入生・新2年生向けオリエンテーション「GSセンター紹介」（2021/4/2、3）

2021年4月2日、3日に開催された社会科学部学生向けの新入生・新2年生向けオリエンテーションで、GSセンターの紹介を行った。オリエンテーションでGSセンターを職員が説明するのは初の試みであり、参加した約600名の新入生、および新2年生およそ300名に対し、ジェンダーやセクシュアリティの説明とGSセンターの機能を紹介することができた。

■ 新入職員研修（2021/04/13）

2021年4月入職の新入職員9名に対し、対面でGSセンターの業務紹介および「クローゼット」

「カミングアウト」「アウティング」等の用語や、職員として業務上必要な対応の紹介を行った。GS センターの開室以来、毎年実施している研修であるが、職員のジェンダー・セクシュアリティに関する知識の水準は年々向上していることがうかがえた。また、本研修内で宣伝し、4/30 に実施した職員勉強会には半数の新入職員が参加してくれた。

■ RA (レジデンス・アシスタント) 研修「LGBTQ+を通じて多様な性の在り方について考える ～RA が学生寮でできる取り組み～」(2021/9/21)

早稲田大学学生寮にいるRAの研修内で、「LGBTQ+を通じて多様な性の在り方について考える ～RA が学生寮でできる取り組み～」と題し、研修を行った。RA は 50 名、関係者を含むと 70 名以上が受講した。研修内ではジェンダー・セクシュアリティの用語とGSセンターの説明を行い、その後ジェンダー・セクシュアリティ、LGBTQ+に関するクイズ、事例検討を行った。事例検討では、各班がレジデンス・アシスタントとしてできることを話し合うだけでなく、現状ある制度や仕組みについて改善すべき点を話し合ったり、友人としてできることなどについても意見を共有する様子が印象的だった。最後に「RA としてできること」を宣言してもらい、それぞれの参加者が寮の中で多様な性のあり方が尊重されるような寮にするためにできることを考えて発言していたことから、本研修を通じて RA のジェンダー・セクシュアリティへの関心の高さがうかがえた。

■ 早稲田ウィークリー取材対応 (2021/10/25)

GS センターが設置されて 5 年目になったことを受け、創設時からいるスタッフ 3 名に対しインタビューが行われた。これまでの歩みを振り返りながら、これからの GS センターに期待する役割について話をした。

記事：早稲田ウィークリー『祝！ 開設 5 年 GS センタースタッフが感じる「早稲田の変化」とは？』

(URL : <https://www.waseda.jp/inst/weekly/feature/2021/10/25/90832/>)

■ 国際教養学部：授業内紹介 (2021/11/2)

担当教員である教育学部の東玲奈准教授より依頼があり、授業内でスチューデントダイバーシティセンターおよび各オフィス (ICC 異文化交流センター、障がい学生支援室、GS センター) を広報した。2 コマを通じて、合計約 200 名もの受講生に英語で紹介できたことで、これまで日本語だけではリーチしづらかった留学生や日本語よりも英語での情報処理を得意とする学生層に GS センターの活動を周知できた。また、感想の中で多くの受講生から、今回初めて GS センターの存在について知ったこと、知ることができて良かったということが共有されたことから、今後の学内インリーチ活動の課題の一層の可視化にもつながった。さらに、スチューデントダイバーシティセンター内の 3 オフィスが協働する機会にもなり、各オフィスの横の繋がりを深めることができた。

■ ALLY 養成研修 (2021/5/21、2021/11/15)

性的マイノリティ等 LGBTQ+を理解し、支援する仲間、ALLY (アライ) として一定の知識や技能を持つ職員が、学内の様々な場面で活躍し、LGBTQ+ 学生が安心できるキャンパスづくりをしてほしいとい

う思いで、春学期と秋学期にそれぞれ 1 回、合計 2 回開催した。休憩時間を含め 5 時間にも及ぶこの研修は、ALLY の育成を目的に、2013 年に公開され、100 か国以上で 25,000 回以上ダウンロードされている Safe Zone Project というフリー素材をもとに、GS センターと本学職員有志、本学学生有志によって製作された。ALLY として前提となる基礎知識はもちろんのこと、実際に ALLY として相談を受けたりどう対応するかなど、事例検討やロールプレイをはじめとしたより実践的な内容も組み込まれている。実施後のアンケートでは、満足度も非常に高く、「自身では差別意識などないと思っていたが無意識のうちに差別的な考えに至る恐れがあることが分かり、自戒の念もこめて大変参考となった」といった声も寄せられ、非常に有意義な研修であることから、次年度はより対象範囲を拡大することを検討している。

■『LGBTQ+ 学生とアライのためのサポートガイド Ver.5』(2022/03/15)

今年度 Ver.5 は、前年度 Ver4 からの大幅な改定はなかったものの、卒業後に証明書の交付を希望する場合の注意点、セミナーハウス利用における配慮の相談フロー、入学センターとの調整内容（入試要項に記載した「戸籍上の性別情報と性自認・性表現が一致していないことによって、受験で不利な扱いを受けることはない」旨）を追記し、LGBTQ+ 学生支援に関する情報を更新することができた。必要に応じて学生がこのリソースを用いることで、修学や学生生活に役立てるとともに、引き続き学内のできるごと/できないことをできるだけ可視化し、今後の大学改善に役立てたい。

(参考 URL : <https://www.waseda.jp/inst/gscenter/news/2022/03/04/5570/>)

(3) 制度・運用の改善

■ 本学における性別情報収集

個人の尊厳、価値観、生き方に関わる重要な情報として、本学は出席簿等の性別表記の削除を行う等の対応を行ってきた。性別情報の管理徹底を一層進めていくため、ダイバーシティ推進室と協働し、単に過去に作成した申請書類を踏襲して利用しているに過ぎない等、不必要に性別情報の収集を行っている事例を削減し、合理的と判断される理由以外の性別情報の収集を取りやめる等、学内における性別情報収集書類の見直しを全学的に実施した。性別情報の収集が合理的と判断された書類については、性別情報収集一覧として、次年度以降一覧化し、公開することを目指している。

■ 本学における「性別」に関する英語表記

英語による性別情報収集場面で留学生等に不安や誤解を与えず、必要かつ適正な情報を収集するために、本学の「性別」を表す英語表記については大学として認識合わせをするなど整備する必要があると考える。GS センターは、学内において、適正かつ配慮のある英語表現が用いられるように、「大学における性別情報収集の見直し」と合わせ、引き続き、関係箇所と連携していく。

■ エレベーターの設置

2021年9月よりGSセンターがある10号館にエレベーターが設置された。本センターは2階にあるため、階段を利用できない学生にとってはバリアのあるセンターであったが、ようやくアクセシビリティが改善された。

■ 相談室の増設

2021年10月より相談室として別途部屋を利用できるようになった。これにより、より柔軟に、学生が希望する日時に相談対応することが可能となった。また、相談以外にも、web会議や来訪者対応で使い、業務の効率化が図られた。

3 学外活動について

今年度は新型コロナウイルスにより、学外でのイベントに参加できなかったものの、例年通り学外での登壇依頼があった。また、今回、企業のイベントにも登壇し、本学のダイバーシティ推進の取組みやLGBTQ+学生支援の取組みについて報告を行った。こうした学外での活動を通じて、LGBTQ+やジェンダー・セクシュアリティ支援に関心を持つ大学や企業が増えることを期待したい。

■ 横浜市立大学 FD 研修 (2021/9/30)

学生部学生支援室様からの依頼を受け、本学におけるダイバーシティ推進への取組みについて、ダイバーシティ推進室とともにオンライン会議システム (Zoom) にて報告した。130 名の教職員の方にご参加いただき、本学のダイバーシティ推進や GS センターの取組みを伝えることができた。質疑応答では本トピックに関する踏み込んだ質問や具体的な質問もあった。

■ 「未来の同僚とよりよく働くために知っておきたい、教育現場の最前線」(2021/12/14)

本センター専門職員が、ソニーグループのダイバーシティ・サステナビリティフォーラム (オンライン開催) の登壇者の 1 人として参加した。フォーラムは「社会人として働いている大人たちが、現在の小学生・中学生・高校生・大学生がどのような多様性教育を受けているのかを理解し、多様性を学んでいる世代とともに働く日に向けて、思考や行動をどう新しくしていくかを考える」機会にするというものであった。当日は300名を超える方にご視聴いただき、GS センター専門職員の立場から学生の状況や学生から受け取ったメッセージを伝えることができた。主催者様からは「個を生かす・相手を知り理解していくといった、多様性教育における日々の実践とそこでご経験にもとづくメッセージから、参加者それぞれに考えるよい機会となったようだ」とコメントをいただいた。

■ 中央大学ダイバーシティセンター研修会 (2022/2/28)

中央大学ダイバーシティセンター様からの依頼を受け、GS センターのサポートガイドの作成にかかわってきた専門職員 2 名が登壇した。研修会では、約 20 名の方にご参加いただき、GS センターのサポートガイドができた経緯や作成しての効果について報告を行った。研修を通じて、GS センターのサポートガイドの歴史を改めて振り返る機会となっただけでなく、中央大学様がサポートガイド作成にあたって比較したり検討するための内容となった。質疑応答の後では、お互いのセンターのオンライン見学会をするなど、互いにLGBTQ+をサポートしていくセンターとして情報交換をすることもできた。

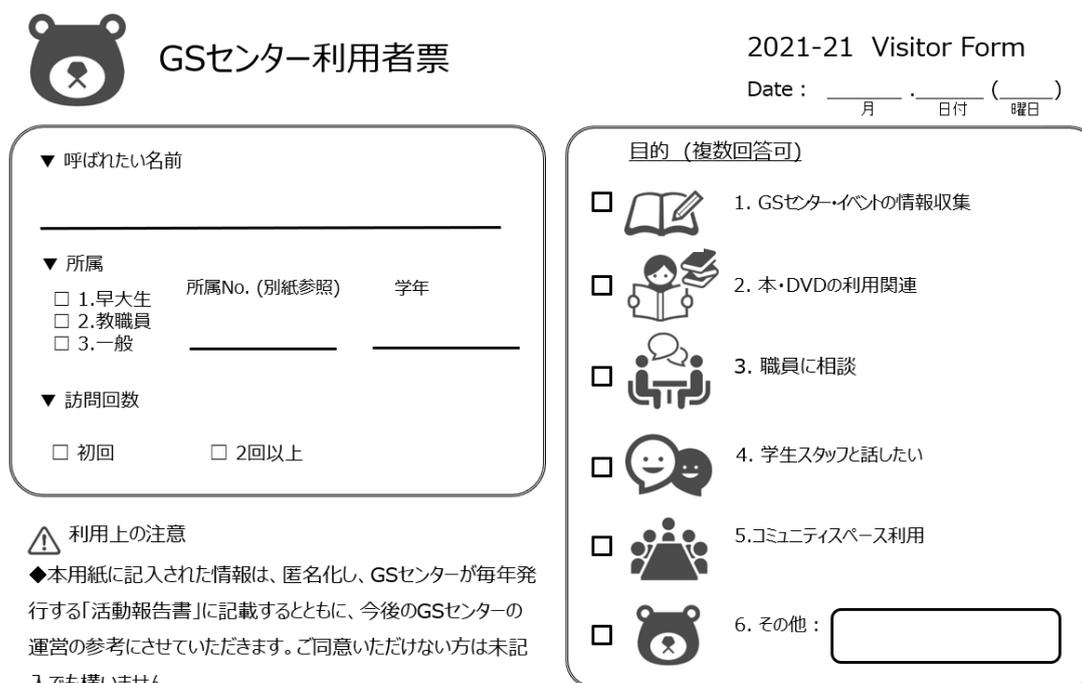
(参考 URL : <https://www.chuo-u.ac.jp/campuslife/diversity/news/2022/03/58747/>)

4 年間利用者数および利用目的

昨年度に引き続き、GSセンターに来室した際に記入させる「受付票」を基に、利用者数や所属、利用目的を集計した（期間：2021/4/1～2022/3/31）。なお、利用者は年度が変わるごとに「新規」につけてもらうよう伝えているものの、必ずしも全員が新規だと申告しているとは限らないことに留意していただきたい。また、オンラインイベントやオンライン相談を利用した人は利用者票の記入がないため、この統計には反映されていない（2017～2019はGSセンターで小・中規模イベントを開催していたり、オンライン相談がなかったことに留意）。

（1）利用者票の改定

今年度より、英語ができるスタッフの増員により、利用者票を日本語・英語で両面印刷のものにした（図3、4参照）。これにより、狭いスペースで情報量が詰まっていたものが見やすくなったと考えられる。また、所属学部だけでなく学年の認知度を参考にするため、学年を入れる箇所を増やした。



The image shows a Japanese version of a visitor form for the GS Center. It features a bear logo and the title 'GSセンター利用者票' and '2021-21 Visitor Form'. The form is divided into two main sections. The left section contains fields for '呼びたい名前' (Name to be called), '所属' (Affiliation) with checkboxes for '1.早大生' (早大生), '2.教職員' (教職員), and '3.一般' (一般), and '訪問回数' (Number of visits) with checkboxes for '初回' (初回) and '2回以上' (2回以上). The right section is titled '目的 (複数回答可)' (Purpose (Multiple answers possible)) and lists six options with checkboxes: '1. GSセンターイベントの情報収集' (GS Center event information collection), '2. 本・DVDの利用関連' (Related to book/DVD use), '3. 職員に相談' (Consultation with staff), '4. 学生スタッフと話したい' (Want to talk to student staff), '5. コミュニティスペース利用' (Community space use), and '6. その他' (Other) with a text input box. A 'Date' field is located at the top right. A warning section at the bottom left explains that information is anonymized and used for reporting.

GSセンター利用者票 2021-21 Visitor Form
Date : ____月 ____日付 (____曜日)

▼ 呼びたい名前

▼ 所属
所属No. (別紙参照) 学年
 1.早大生
 2.教職員
 3.一般
▼ 訪問回数
 初回 2回以上

▼ 目的 (複数回答可)
  1. GSセンターイベントの情報収集
  2. 本・DVDの利用関連
  3. 職員に相談
  4. 学生スタッフと話したい
  5. コミュニティスペース利用
  6. その他 : _____

⚠ 利用上の注意
◆本用紙に記入された情報は、匿名化し、GSセンターが毎年発行する「活動報告書」に記載するとともに、今後のGSセンターの運営の参考にさせていただきます。ご同意いただけない方は未記入でも構いません。

図3 日本語版利用者票



Visitor Form

2021-22 Visitor Form

Date : _____ (_____)
Month Day day of the week

Print the name you go by

Membership and department

- 1. Waseda stu. Department No. Year (students only)
2. Faculty staff (see the appendix)
3. Other

How many times have you visited the GS Center?

- first time 2 times more

Privacy Notice

The information you provide here will be aggregated and will only be used to make the GS Center's Annual Report, as well as to improve the work of the GS Center's day-to-day operations.

Purpose of visit (Check all that apply)

- 1. To collect information for GS Center/events
2. To read, borrow, or return books/DVDs
3. To consult a professional staff on gender or sexuality issues
4. To chat with a student staff
5. To use the community space
6. Others :

図 4 英語版利用者票

(2) 利用者数

今年度は昨年度よりも開室日数を増やし、2月の早稲田キャンパス入構禁止期間(2/3~2/28)を除きおおむね開室したものの、10時から16時までの前後1時間短縮、図書ラウンジ3名、コミュニティスペース4名定員とした。

2021年度のGSセンターの利用者数は、延べ人数で824名、実人数は190名であった(図5参照)。これは過去5年間の利用者票を比較した図6を見ても分かる通り、2020年度のコロナウイルス感染症が拡大した昨年度よりも、少しずつ利用者が戻ってきたことがうかがえる一方で、実人数は延べ人数に比べあまり伸びていないことが分かった。

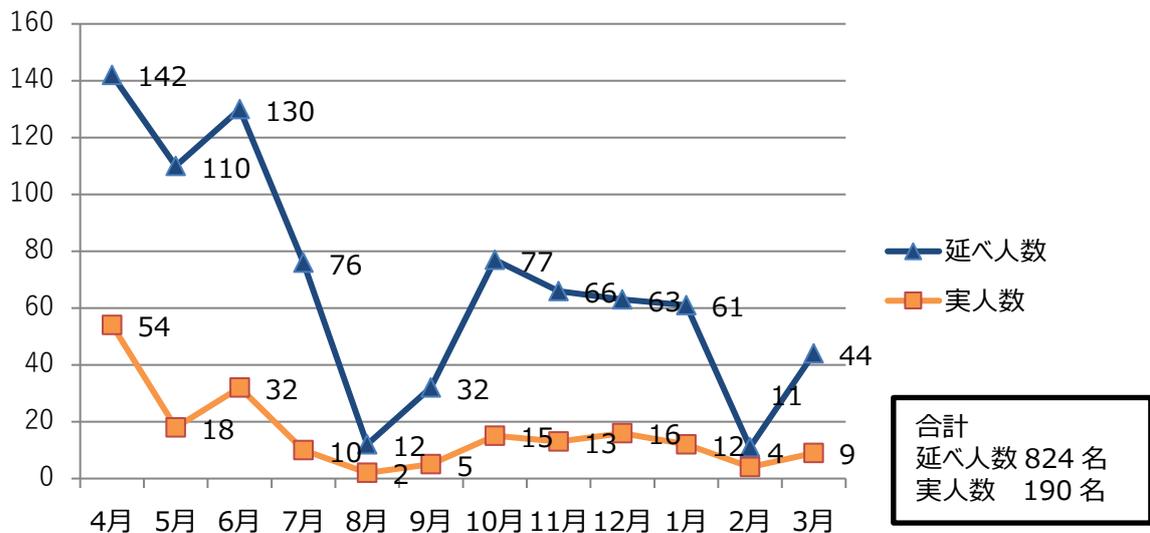


図 5 2021 年度利用者数の推移

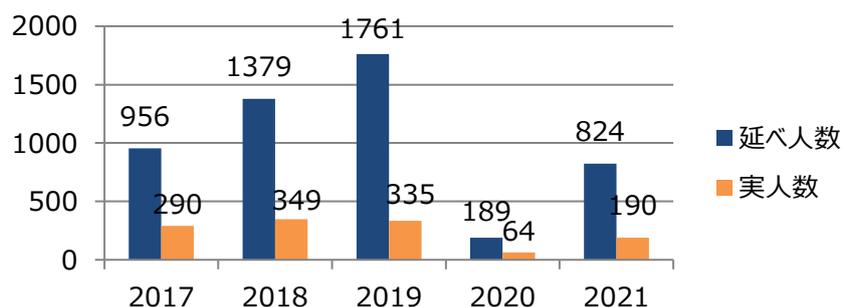


図6 5年間の利用者数

■ 利用者の内訳

「利用者票」に記載してある所属の内訳（表5）、それに基づく所属キャンパスの利用人数（表6）、学年（表7）はそれぞれ以下ようになった。昨年と同様、このデータは2回以上来室している利用者もその都度1名としてカウントしているため、必ずしも所属と関心の高さの関連性を意味づけることはできないことに留意したい。

表5 利用者票による来室者の所属内訳（延べ人数）

所属	人数	所属	人数
政治経済学部	85	創造理工学研究科	5
法学部	64	先進理工学研究科	0
文化構想学部	207	環境・エネルギー研究科	0
文学部	123	情報生産システム研究科	0
教育学部	31	社会科学研究科	0
商学部	1	人間科学研究科	1
基幹理工学部	4	スポーツ科学研究科	0
創造理工学部	2	国際コミュニケーション研究科	0
先進理工学部	7	アジア太平洋研究科	1
社会科学部	53	日本語教育研究科	0
人間科学部	20	商学研究科ビジネス専攻	0
スポーツ科学部	16	政治学研究科公共経営専攻	0
国際教養学部	68	法務研究科（法科大学院）	1
政治学研究科	9	ファイナンス研究科	0
経済学研究科	0	会計研究科（会計大学院）	0
法学研究科	5	教職研究科（教職大学院）	0
文学研究科	7	経営管理研究科（ビジネススクール）	0
教育学研究科	0	教職員	18
商学研究科	0	一般	86
基幹理工学研究科	1	留学生	0
合計			815

表 6 利用者票に基づくキャンパス分布

キャンパス分類	学部	大学院	合計	割合
早稲田	302	16	318	44.7%
戸山	330	7	337	47.4%
西早稲田	13	6	19	2.7%
所沢	36	1	37	5.2%
合計	681	30	711	

表 7 利用者の学年

学年	人数	割合
1年	104	14.5%
2年	188	26.1%
3年	173	24.1%
4年以上	234	32.5%
合計	719	

それぞれのデータから、GS センターがある早稲田キャンパスからだけではなく、戸山キャンパス（主に文化構想学部、文学部）の利用者も多いことが分かった。また、利用者の学年は2～4年次が多く、相対的に新入生が最も少なかったことから、新入生へのアプローチが課題として残った。また、所沢キャンパスや西早稲田キャンパスの利用者数は、早稲田キャンパスや戸山キャンパスの学生と比して少ないため、アウトリーチや積極的な広報が例年に引き続き課題となっている。

他にも、一般の利用率も例年通り高く、GS センターが早大生・早大教職員以外にとっても居場所となっていることや、関心の高さがあることが分かった。引き続き学内外問わず、数少ないLGBTQ+やジェンダー・セクシュアリティ関連のリソース・セーフスペースとしての機能を果たしていきたい。

（3）利用目的

2021年度のGSセンターの利用目的は、「本・DVDの利用関連」が最も多く、次いで「コミュニティスペースの利用」、「相談」、「GSセンター・イベントの情報収集」、「学生スタッフと話したい」であった。コロナ禍になり、リソースの拡充と広報に力を入れており、イベントやtwitter、Instagramで学生スタッフが中心となり様々な広報をしてくれた結果、センターの大きな機能の1つである、リソースセンターとしての機能を十分果たせていたように感じた。それ以外の項目については大きな差はなく、コロナ禍においてもGSセンターを利用したいという学生がいることが分かったものの、利用者には上限を設けていることや、積極的に会話しにくい雰囲気があることから、センターで他者との交流を目的としたものはコロナ以前と比較しても減ったように思われる。

表 8 利用目的

利用目的（複数回答可）	件数	割合
GSセンター・イベントの情報収集	114	10.7%
本・DVDの利用関連	469	44.2%
相談	169	15.9%
学生スタッフと話したい	99	9.3%
コミュニティスペース利用	164	15.5%
その他	46	4.3%
合計	1,061	

5 相談件数および相談内容

GSセンターでは、早大生や、早大生に関係する教職員・保護者を対象に、ジェンダー・セクシュアリティに関する知識のある専門職員が可能な範囲で相談支援をしている。対応内容として、来談者の話を傾聴し、必要に応じて学内関係部署の紹介あるいは連携を図ることで対応したり、外部機関に繋げたり、個々のニーズに応じた対応を可能な限り行っている。また、2020年度より開始されたオンライン相談を、2021年度も継続して実施した。

2021/4/1～2022/3/31の1年間での相談人数は、延べ人数で239名（実人数66名）であった内、オンライン相談91件（38%）、対面相談148件（62%）であった。相談内容については、これまでの相談の多様性を考慮し、分類を15項目に変更した。各分類と主な相談内容は表11の通りである。

表9 相談分類と内容

相談分類	主な相談内容
性自認・性別違和・ 性表現・性別役割	性別の違和感やジェンダー・アイデンティティ、服装や身体に関する性表現、文化に規定された性別役割についての悩み
性的指向・性愛・恋愛	誰に性的指向が向くか、性愛の対象は誰か、恋愛の対象は誰か、交際・パートナーシップなどの悩み
性行動・性の健康	セックス、マスターベーション、性感染症、性行動回避・過多、セーフアーツ、性器に関することなどの悩み
クローゼット・カミングアウト・ アウトティング	ジェンダーやセクシュアリティに関する自他のカミングアウト行為・クローゼット行為、自他のアウトティング行為に関する悩み
家族関係	家族との不和、別居や独立、死別や離別、家族からの暴力やハラスメント、ひきこもりなどの悩み
人間関係全般	人間関係全般、対人関係、コミュニケーション方法、友人・知人、周囲の無理解・偏見・差別などの悩み
心と身体の健康	精神的／身体的／発達の／知的な疾患や障がい、医療全般に関すること、依存や嗜癖などの悩み
大学内連携・大学内制度	大学内の制度について、他部署について、二次被害について、連携合意についての悩み
就活や就労	アルバイト、就職活動、就労先の人間関係・いじめ・ハラスメントについての悩み
暮らしやお金	奨学金について、社会保障制度について、消費生活関連、違法な契約についての悩み
性的な暴力・ハラスメント	性暴力、性犯罪、ストーカー、ハラスメントについての悩み
言語や文化の違い	国籍、文化、言語に関すること、留学全般に関することの悩み
情報収集	レポートや自身の学びのための情報収集（ジェンダーやセクシュアリティ、LGBTQ+やSOGIに関する知識）
取材(設立経緯・運営など)	GSセンターに関すること（設立経緯や運営に関することなど）。
その他	上記以外に関すること。

表9の分類に基づき、1回の相談内容をそれぞれの区分に分類した結果、表10のようになった。なお、1回の相談内容が複数の分類にまたがる場合、複数としてカウントを行っている。また、過去5年間の相談人数（延べ人数、実人数）をまとめたデータは図7のようになった（ただし2017年度、2018年度は実人数のデータがないため、延べ人数のみ）。

表 10 相談内容の分類と件数

分類	件数	割合
性別違和・性表現・性別役割	138	19%
性的指向・性愛・恋愛	110	15%
性行動・性の健康	20	3%
クローゼット・カミングアウト・アウティング	43	6%
家族関係	62	8%
人間関係全般	118	16%
心と身体の健康	107	15%
大学内連携・大学内制度について	29	4%
就活や就労	37	5%
暮らしやお金	21	3%
性的な暴力・ハラスメント	5	1%
言語や文化の違い	9	1%
情報収集	26	4%
取材(設立経緯・運営など)	3	0%
その他	3	0%
合計	731	

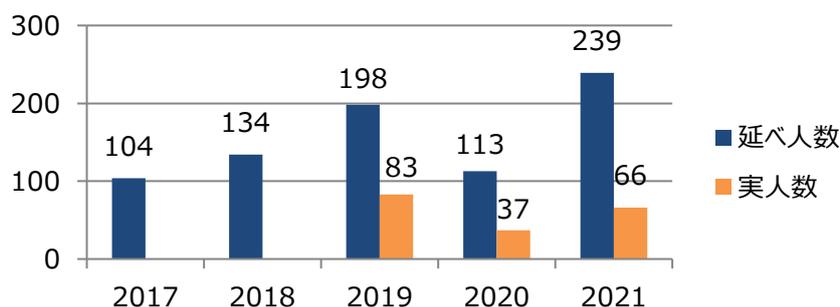


図 7 5年間の個別相談利用者数

特に触れておきたい点として、最も多かった相談は「性別違和・性表現・性別役割」であり、次いで「人間関係」、「心と体の健康」、「性的指向・性愛・恋愛」に関する相談が並んだことがあげられる。「性別違和・性表現・性別役割」や「性的指向・性愛・恋愛」に関する相談では、従来の男女二元論や恋愛・性愛をすることを前提とした相談だけでなく、男女二元論に収まらないものや恋愛・性愛をすることを前提としない相談などがあった。そのことが起因して、「人間関係」や「心や身体の健康」に関する相談も多く、相談者への支援を充実サポートすることはもちろん、大学内にある男女二元論・性愛や恋愛を前提とした風土・環境にアプローチしてだけでなく、今年度「X ジェンダー・ノンバイナリー」や「Aro/Ace スペクトラム」をテーマにしたイベントを開催したように、今後も継続した啓発活動をしていきたい。

また、図 7 から、コロナ禍であるにもかかわらず過去 5 年間で最も多い相談人数となった一方、1 人あたりの相談回数が増加していることが、延べ人数と実人数の割合から明らかとなった。この背景には、昨年度同様コロナ禍で人間関係が希薄になったことに加え、ジェンダー・セクシュアリティに関して相談できる場所が少ないこと、オンライン相談などで GS センターに物理的に訪問せずとも個別相談を利用しやすかった

ことがあげられる。コロナ禍では学内外を問わず対面での居場所が失われていることや、普段から雑談の機会もなく他者との交流機会が減っていることから、今後 with コロナ禍で GS センターをどのような場所にしていくなか、ピアサポーターの学生スタッフと一緒に居場所と交流スペースを対面・オンライン双方で維持していきたい。

同時に考えたいのがメンタルヘルスの課題である。GS センターでの相談は、内面や他者との関わりについての話題が多く、時には保健センターと連携する事例もコロナ禍ではよく見られた。GS センター設立当初は「ジェンダーやセクシュアリティに関するちょっとした相談」を想定していたが、開室して5年経ち、改めて心理的な知識やアセスメント能力が求められる場面も多かった。今後はより保健センターと緊密に連携しながら、学生を包括的にサポートできるセンターを目指していきたい。

6 今年度の課題と今後の展望

(1) 今年度の課題

上記の成果を踏まえ、次年度は以下のような課題が挙げられた。

- ① スペースにおける課題：コロナ禍でも学生等が安心して利用できる環境にするためには、部屋の広さは重要で、「ステイホーム」が安全ではない学生にとっての物理的スペースとしての課題を残している。
- ② 学内制度の整備：本学ではシステム上の性別は戸籍上の性別であり、氏名も「本名」か「通称名」である。特にオンライン授業下では戸籍上の氏名が画面に表示されることで授業に参加しにくくなったという相談もあった。また、「通称名使用願」を利用すると、保証人への連絡時の氏名も全て変更されてしまうことから、親へのカミングアウトが必須となる。今年度は学部事務所と連携し、通称名を利用していても保証人への連絡は本名となるよう配慮したが、ゆくゆくはシステム上でも細やかな配慮ができるようシステム改修が必要である。
- ③ 外国語対応における課題：2020 年度秋学期以降、学生スタッフによる英語等外国語でイベントが開催できていない。コロナ禍の影響下、多くの留学生が渡日できていない状況はあるが、本学には多様なバックグラウンドの学生がいる。さらに LGBTQ+ 学生となると、日本においてはダブルマイノリティの学生となる。ただでさえ孤立しやすいダブルマイノリティの学生にとっての居場所づくりをあらためて念頭に置いて活動する必要がある。また、これまで英語での相談は、心理的な側面を話す際に、語彙の側面から対応できる内容に限りがあり、相談者に通訳者を用意してもらう等相談者の協力を前提にしていたが、5 月より、週に 1 日、英語対応可能な体制にすることができた。引き続き、外国語対応を強化していくとともに、保健センター等学生相談関係箇所との連携も含め、より良い相談体制を模索していく。
- ④ 人員体制における課題：GS センターを勤務地とする職員は専任職員（管理職）1 名、常勤嘱託（専門職員）1 名、非常勤嘱託（専門職員）1 名と少人数である。職員の安全に配慮しかつ安定したセンター運営を心掛けているが、コロナ禍においてはでき得る工夫も限定的である。
- ⑤ 認知度の課題：今年度も MyWaseda を通じたアナウンスを行ったことで、早稲田キャンパス以外の学生やあまり利用がなかった学部の利用者が多かった。全学的なアンケートは収集したことがないものの、イベント参加者のアンケートや来室した学生から届く声からは GS センターの認知度は思うほど高くないため、今後も MyWaseda や全学メールで広報を行ったり、SNS での発信を積極的に行うなど、工夫が必要である。

これらの課題は GS センターのみですぐに解決できるものではない。本学学生のより良い修学及び学生生活の環境を整えていくためにも、引き続き、関係箇所に働きかけていきたい。

(2) 今後の展望

次年度に具体的に取り組むことができそうなプロジェクトを「展望」とし、以下にその内容を紹介したい。

① 対面・オンライン両サービスの質向上

2020年度はオンラインがメインとなった1年であったが、物理的利用者やオンライン利用者へのサービスを今後どのようにしていくかは大きな課題となった。2021年度はすべてのイベントをオンラインで実施したり、できるだけ密を避けた形でGSセンターのコミュニティスペースを開放し、利用学生にとって、アクセスしやすい環境づくりを心掛けた。今後はオンラインのメリットを活かしつつ、対面での効果も踏まえ、より学生のニーズと安全に配慮したサービスを展開する。

② GSセンターの円環ミッションの維持と広報の強化

GSセンターのミッション機能維持は継続して重要であり、全てのミッションが実行されることですべてが円滑に回っていくことが考えられる。オンラインを活用することで新規層は開拓できたものの、未だに早稲田・戸山キャンパス以外の学生のアクセス数は低く、課題が残る。2021年度より学生スタッフのアイデアでInstagramが設置されたり、スチューデントダイバーシティセンターで立て看板を設置したことで反応があったことから、引き続き広報を継続して行い、学内の認知度向上に努めたい。

③ 学内連携による学内制度の整備・啓発活動の強化

昨年度同様、どんなジェンダー・セクシュアリティの学生であっても安心して利用できる修学環境やキャンパスづくりのために、引き続き学内連携を強めていきたい。特に、連携したことがない学部・大学院事務所や箇所は、実例がないと難しそうだが、キャンパス内の整備のためにもアウトリーチしていきたい。

④ 学外機関への啓発活動と連携強化

今年度も他大学や一般企業から、LGBTQ+学生支援に関する登壇依頼があった。全国的にオンライン会議システムが定着したこともあり、遠近問わず、積極的に学外機関に対して本学の取り組みを伝えることで、あらゆるLGBTQ+が生きやすくなる社会づくりに寄与したい。また、少しずつ大学でのSOGI支援が広がってきたことから、情報共有や連携などを行い、より多くの大学でより良い学生支援が実現できるよう尽力したい。

7 学生スタッフの声

「学スタネームで私を呼んで」

学生スタッフ しゅん D

「こんにちは、学生スタッフのしゅん D です！」

5 年間、私は GS センターの学生スタッフをしてきました。

5 年前、私はまだ「しゅん D」ではありませんでした。GS センターを通じて関わったたくさんの方が、「しゅん D」「しゅん D ちゃん」「しゅん D さん」と呼び掛けてくれたので、私は「しゅん D」になりました。

私がまだ「しゅん D」ではなかったころ、「GS センター」もまた、ガラリとしていて、誰も“そこ”を「GS センター」とは呼んでいませんでした。ただの 10 号館の 2 階の 1 室です。

私の先輩たちは、大学に「LGBT 学生センター」を作ることを提案し、私と私の仲間たちが ICC のラウンジで会議を開き、「GS センター」という名前を付けました。それが承認され、その場所は「GS センター」と決まりました。でもまだ誰もそこを「GS センター」とは呼んでいなかったし（議論段階では「ジェンダーオフィス」と呼ばれていました）、人も、本も、何も無い部屋でした。（カーテンはありました。）

2017 年 4 月に私は職員の大賀さんと“そこ”に入り、多くの人に名前を呼んでもらえるように色画用紙に「GS センター」と書いて、ドアに貼りました。

それから 5 年間、本当にたくさんの方が出入りし、たくさんの方が「GS センター」と“そこ”を呼んでくれました。私もたくさん足を運び、たくさん「GS センター」と口にしました。備品のティッシュで拭っても拭っても溢れる涙をこらえきれない時、きっと廊下に漏れてしまおうだろうなという大声で笑った時、怒りで足が震えカーペットごと踏み抜いてしまいそうな思いが止まらない時、いろんな感情がありました。

スタッフがタイピングする音。利用者さんが本をめくる音。コーヒーの匂い。ホワイトボードの落書き。遠くに聞こえるチャイム。そんな静かな 16 時もありました。

ドラッグクイーンのメイク。政治家のモノマネ。大爆笑。外ステージから聞こえる音楽。熱い議論。お弁当とお菓子の匂い。もう本当にうるさい 15 時もありました。

「地球が滅亡しそうになったら、最後はここに籠って、最後の逆転の一撃に出るんだ」というような話をしたことがありました。（あまりに馬鹿らしいので省略しますが、アニメ 2 期までその場にいた利用者さんとスタッフで考えました。最終回前に職員さんがやられた感じになり絶望の瞬間に次回予告が入るらしいです。）何が言いたって、地球滅亡前に籠城したいくらい GS センターはお気に入りの場所でした。少なくとも、私にとっては。

ただの“そこ”だったところが「GS センター」と名付けられ、多くの方が足を運び共に過ごしてきた中で、「GS センター」は「GS センター」になりました。

もちろん、本は増え、最初の本棚では足りなくなり、PC も増え、ちょっとした掲示物も増えて、殺風景さと

は程遠い空間へと「GSセンター」は変化してきました。でも何よりも「GSセンター」を「GSセンター」たらしめたのは、スタッフの汗と、利用者さんの涙と笑い声、ここで生まれた出会いと思い出です。たくさんの方の利用者のみなさん、本当にありがとうございました。

「しゅん D」という名前も、この場所でたくさんの方に呼んでもらい、育ててもらいました。“そこ”が「GSセンター」になったように、私もまたこの場所と時間によって「しゅん D」になることができました。

人に呼び掛けてもらって、やっと私は応えることができます。愛しさを込めて、尊敬を込めて、私のことを「しゅん D」と呼び掛けてくれたすべてのみなさん、本当にありがとうございました。あなたが「しゅん D」と呼んでくれたから、あなたとの出会いがあったから、あなたとの会話があったから、私はこの名前がお気に入りです。自分を愛せます。

まだ私が「しゅん D」じゃなかった頃、先輩に「なんて呼んだらいい？」と聞かれて、答えられませんでした。その質問の意味も、LGBT とはなんぞやも、何より、自分が一体何者であるかがわかりませんでした。何かを求めてフラフラと「早稲田大学に LGBT 学生センターを作る！」サークルにたどり着きましたが、私はその「何か」を説明する言葉を持っていませんでした。

先輩たちは、たくさん説明する言葉を教えてくれたし、何より私に、たくさんのお会いをもらって「GSセンター」を残してくれました。私はそこで「しゅん D」とたくさん呼んでもらい、備品のティッシュを涙で溶かすたびに、少しずつ自分が何に傷つき何に怒る人なのかを理解しました。私の場合は、自分が何者で、何に怒っているのかを理解することは、手足を動かすエネルギーへとつながりました。「しゅん D」になれました。

最近では、今度は私が先輩になってきたので、何か後輩にできることはないか、残せるものはないかと手を動かしてきたつもりです。学スタは卒業するけれど、これからもそのつもりです。

長々と「GSセンター」という名前と「しゅん D」という名前のちょっとした歴史を話してしまいました。私は、私を「しゅん D」にしてくれたこの場所が大好きです。

大学の施設ですが、誰かが声を挙げ、誰かが名前を付けてできました。（だからあなたも社会を変えられるよ！）

そして、誰かが名前を呼び続けるから存続できます。どうか末永く「GSセンター」と呼ばれ続けることを祈っています。

「呼ばれたい名前」を聞かれて戸惑う人を、迎え入れ続けてください。

たくさんのお本で、モヤモヤを説明する言葉を示してください。

会話溢れて、ピアサポートの場を開き続けてください。

それで、たくさんの方に「GSセンター」って呼ばれてください。

ところで、「しゅん D」の D は何を意味してるんですか？って？

その話は、まだどこかでお会いした時にしましょうかね。すぐ会えますから。

長い間、本当にお世話になりました。ありがとう。

「以上、学生スタッフのしゅん D でした！ ばいばい！」

「ゆるい連帯を築き、ともに歩む仲間たちに出会えた 4 年」

学生スタッフ ジウ

私が早稲田に入ることを決めたのは、学部の面接を受けに来た日、大隈銅像の後ろから見える 10 号館の窓にかかっていたレインボーフラッグを見つけた瞬間です。セクシュアル・マイノリティの学生団体が貼った壁新聞が裂かれる国で暮らしてきた私には、大学公認の LGBTQ+ 支援センターがあるという事実は、ある意味ショックであり小さな希望として近づきました。ここなら、私をありのまま受け入れてくれる仲間に出会えるかもしれないというキメキと、ここではどんなことが起きるんだろうという期待が私をこの大学、GS センターに導きました。

実際 GS センターで働いた 2.5 年間、小規模から大規模までいろんなイベントなどに関わらせてもらいながらたくさんの経験や知識を積みましたが、その中で最も大切なのは、共に歩いていく仲間たちに出会ったことです。

外国人留学生として初めて来日した頃、私は日本社会 — あるいは留学生コミュニティの中に馴染むために自分自身を「何かにフィットさせなければいけない」、「どこかズレている」という感覚に押さえ付けられていて、どこか不安定でいじけていました。その中で、GS センターで出会った人たちは、「ちょっとズレたままでも大丈夫」という事実に気づかせてくれました。

GS センターで出会った仲間たちは、それぞれ自分の生存術を持ち、社会の「ふつう」や「常識」と言われるものに対抗する方法、主体としての生き方を見せてくれました。カジュアルに自分の「ズレた」考えをしゃべりながら場を和らげることから社会の偏見や差別に立ち向かって戦うことまで、自分がそれまで知らなかった視点ばかりで、私自身も自分の「ズレた」姿に向き合うことができました。GS センターで出会った職員の皆さんは、自分さえ自分のことを信じられなかった時に私の可能性を信じ、2 年以上仕事を任せてくれました。おかげさまで、1 年目にはできなかったことが次の年にはできるようになったり、少しでも成長できたなと思います。

GS から生まれた短く長い縁もそうです。GS を訪ねてくださった利用者の方と交わすほんの短い会話から予期せぬ気づきを得たり、時には恥ずかしくなったり、または長いお付き合いの中で誰かが（良い意味で）変化していくような姿を見ながら、自分の世界が広がりました。直接企画したイベントに参加するために時間を割き、勇気を出してこの空間に来てくださった方々を見ながら、私自身も勇気を得ることができました。

センターに来ている目的はそれぞれかもしれませんが、同じ空間に居ることで生まれるゆるい連帯感、共に歩いていく仲間たちが居るという感覚は、これから社会に出てからも大切にしていきたいものです。

嫌悪と差別が蔓延する世の中で、GS センターの存在は私自身にそうだったように、誰かには一息つくための空間であり、誰かには救いの空間、また誰かには新しい知的刺激の空間であると思います。究極的には GS センターの存在が必要でなくなる日が来るまで駆け続け、より多くの絆を作っていくことを心より祈っております。ありがとうございました。

「long story short :2×2 平方フィートの小さな思考の箱から抜け出して」

学生スタッフ Kokoro

私にとって、GS センターで働くというのは、脆弱で発展途上の自己との対峙と葛藤の時間でもありました。なかでも、今後の人生においてもずっと大切にしていきたいと思う印象的な学びを2つ書き記しておきたいと思います。

1つ目は、自分の不完全さどう向き合うかについてです。大学でジェンダーやクィア理論とそれに交差する学問を学際的に学びつつ、GS センターで働いて「他者」の声に耳を傾けはじめると、まずはじめに、自分が無自覚に内在化してきたものの多さや、それを脱構築することの難しさを実感し始めました。自分が発した言葉で無自覚に他者を傷つけてしまうのではないかという不安を強く感じるようになっていたのをよく覚えています。それによって、イベント等で利用者の方々と話をするのに過度に緊張してスムーズに言葉が出てこなくなってしまった時期もありました。その時に、胸に刺さったのが、職員の渡邊さんがおっしゃっていた「誰もが学びの途中」という言葉です。自分の頼りなさに八方塞がりになるのではなく、自分が「学びの途中である」ということを認めた上で、想像力と配慮を尽くして人に接するということだと思います。人々がそれぞれ固有である以上、誰しにも通じる究極な答えはないことも今はよくわかります。そして、自分の立場を示したり目の前の人に寄り添ったりする一方で、より良い方法や自分の間違いに気がついた時に、その都度、自分の信じていたものや考え方を自分自身で壊す勇気を常に持ち、目の前の人と新たな対話を続けていくことの方がずっと大事だと知りました。

もうひとつは、前の話と少し重なりますが、人間らしさを楽しむということです。GS センターで働いていると、利用者の方々との対話をする機会が多く、そのなかには時に個人的な語りも含まれます。すると、必然的に「他者」との交流を自分をうつす鏡にして自己を内省することも増えました。どの経験も固有であると頭では理解する一方で、自己のアイデンティティにもなにか一貫性や妥当性、説明可能性(なくて良いのに!)を求めて、自分のなかの流動性に混乱することもありました。過去に傷を負った自分のまだ癒えていない部分があることに気がつくこともありました。それでも、GS センターに行き、オンラインラウンジ等で皆さんが今考えていることやモヤモヤを聞いていると、不思議と、共感する以上にかけた言葉が出てきたものです。「人間だから不完全で、矛盾して、脆弱で、学び、人との関わりの中で変化する。もちろん、自分は何者かを理解したくなって考え込んでしまうこともあるけれど、既存のカテゴリーのそれ自体も実は作られたもので、本来流動的で複雑な私たちはそれで語れないこともある。自分の経験が主体であることを忘れないでいたい。」そんな風に考えます。そうしている内に、段々と自分に対しても同じように言葉をかけてあげることができるようになりました。働き始める前よりももっと、クィアであることや社会をクィアすることが本当に面白く、楽しいことだと今は感じます。

こうした気づきのもとで、自分の立場や届けたいメッセージが明確になり、最後に約 750 名もの方から参

加申込みをいただくことになった大規模イベント、A スペクトラムの観点から構造的な社会規範を問い直す「絶対恋愛になる世界 vs 絶対恋愛にならない私」の企画・開催に至りました。1年ほどかけてじっくり考えたこのイベントでは、A ロマンティック A セクシュアルの当事者に限らない多くの方々から、「多くの気づきがあった」「心が軽くなった」という声をいただけて、とても大きな安堵を経験したのを覚えています。心を開いて多くの話をしながら一緒に準備をしてくださった職員の神林さんと、関わってくださったすべての方に感謝の気持ちでいっぱいです。

大規模イベントだけでなく、日々GSセンターのなかやオンラインラウンジで利用者の方々とお話した時間はなによりも貴重なものだったと思います。「Kokoroさんと話すために来ました」「はじめて誰かに話せた」「すごく居心地が良い」と笑顔で伝えてくださる皆さんのおかげで、学問やお仕事に対する原動力がうまれていたし、みなさんと一緒に同じ問題に向き合える時間が、何より私自身にとっても心地よい居場所となりました。

ジェンダーやセクシュアリティの問題に限らず、自分の特権というのはその時に属している社会/環境によって変わります。私がこれまで周囲の人々にそうしてきてもらったように、私も誰かにとっての「自分が相手に見えている」と感じられるような居場所であれるように、特権をよく用いながら常にしなやかに変容する人でありたいです。

私はこの後、海外の大学院に進学をします。いくつかの言語に跨った自分の多文化性をいかして、越境するアジアクィアの精神分析や AroAce スペクトラムをはじめとした「ない」の欲望について研究する予定です。GSセンターで得た貴重な経験と知見を、また別の場所に還元し、インターセクショナルな連帯の可能性を探れるよう「生存を第一に」考えながら頑張ってみようと思っています。

職員の皆さんも学生スタッフのみなさんも素敵な方ばかりで、こんなにポンコツな私が伸び伸びと働けたのはGSセンターだったからだと思います。ご迷惑をおかけしたことも沢山ありますが、日々、心強くも温かい支えと導きで、学びの機会を与えていただいて本当にありがとうございました。皆さんと働けたことが幸せです。

最後に、GSセンターにおける活動のなかで出会った利用者の皆さん、活動を支えてくださる関係者の皆さん、そしてセンター創立から今日までの発展に貢献してくださったすべての方に心からお礼を申し上げます。早稲田大学GSセンターが、今後も多くの人にとって心安らぐ居場所となりますように。

おわりに

「新陳代謝の恩恵と困難」

組織というものは新陳代謝を繰り返すもの。来る人がいれば去る人がいる。それはもちろんなのですが、大学組織はその移り変わりが特に早いように感じます。人の新陳代謝によって、新しい考えが組織に芽吹き、また違った風を起こしてくれる。それは素晴らしいことですが、新しい体制を構築していくには別の苦労があります。特に GS センターはまだ 5 歳。ようやく子どもらしくなってきたお年頃です。ただ一つの正解などない中で、真のダイバーシティ&インクルージョンを目指す道を模索する日々は、楽しくもあり、しかし困難の連続でした。人を動かすために必要なことは、時間をかけて、その人と真に向き合うことなのかもしれません。今年は構想から 1 年以上の時間をかけて実現した ALLY 養成研修、GS センターの職員になってから絶対にやりたいと思っていた AroAce のイベントなど、実現したいと思っていたことが実を結んだ年でもあり、性別情報収集一覧の公開や英訳表記の整備など、あと一步届かず辛酸をなめた年でもありました。私自身もいよいよ砂時計の砂が残り少なくなってきました。つい到这里を去るその日まで、大河のように歩み続けようと思います。

GS センター専任職員 神林 麻衣

「常に成長を追い求めること」

配属されて 1 年以上が経過し、GS センターで行っていることや求められることが分かってきたのが今年度。大規模イベントの運営に携わったり、サポートガイドを作成したり、学内連携したりと業務をする中で、2 つ気付きを得ました。1 つは、学内で GS センターの認知度は高いものの、まだアライは少ないのでは？ということ。早稲田で LGBTQ+ 学生が過ごしやすくするには、学内のさまざまな制度を整えると同時に、教職員がアライとしての意識を持つことが必要になります。ALLY 研修などを通じ、学内にアライを増やしていけるよう、一 GS 職員として努めていかねばなりません。もう 1 つは、GS センターは常に成長が求められる場所であるということ。部署によっては今ある業務をいかに効率的に行うかが大切になる場合もありますが、GS センターでは、LGBTQ+ 学生のために何が必要かを考え、自ら課題を設定し、その達成を目指す...ということが大切になります。私自身の意識が今年度は薄く、GS センターの成長につなげる行動ができなかったのが反省点です。来年度は、学内にアライを増やすのを大きな目標にしつつ、学生たちのために何ができるかを考え続け、行動に移せるようにしたいと思います。

GS センター専任職員 白戸 みな萌

「GSセンター：個人が集まり早稲田大学を変えていく居場所」

今現在、最終出勤日をまさに終えようとしています。最終日まで怒涛の日々で、ほっと振り返る間もなく仕事をしていましたが、その間にぼつぼつと、何人かの方が訪ねてくださいました。嬉しい反面、「自分はこのセンターで何ができたんだろうか」と、少し戒めにも似た感情も浮かび上がってきました。がむしゃらに走った後を振り返り、満足したいような、しちやいけないような、複雑な気持ちでいます。それはきっと、まだまだ取りこぼしている人がいたり、変えたかったものを変えられなかったり、やりたいことをやれなかったからだと思います。

任期満了を意識してから「もっとやれることがたくさんあったのに、このまま道半ばで終わってしまうのが嫌だ」と漠然と思っていました。しかし、そんなタイミングでいつも利用者やスタッフの皆さんに感謝を伝えられ、そのたびに私は「できなかったこと」よりも「小さなできたことの積み重ね」に目を向け、1人1人の利用者に向き合っていくことができました。

社会や組織など、大きなものを変えていくためには「小さなこと」の積み重ねが必要です。声をあげた「早稲田大学生たちの想い」がGSセンターをつくり、そこに私「個人」が生きづらさから学びを深めている中で、奇跡のような確率でGSセンターの職員になり、「利用者1人1人」の想いがGSセンターに寄り集まって、「早稲田大学」を変えていく。その積み重ねが「GSセンターの現在」であり、それはこれからも、GSセンターに関わるみなさんがバトンを繋いでいってくださると信じています。

私が慢心せず、GSセンターとして積み上げてきた「小さな」ことは、皆さんの想いがあってこそのことだと、いつも感謝していました。私をGSセンターの職員にいただき、本当にありがとうございました。これからは別な形で早稲田大学を、社会を変える1人として、「小さな」活動を続けていきます。またどこかでお会いしましょう。

GSセンター専門職員 渡邊 歩

「『小さなセンター』を大きくするんじゃなくて、たくさんの『小さな声で』で埋め続けること」

何気ない日常に溶け込む、小さな小さなGSセンターと小さな声。

「うん、そうだね、じゃあまた来まーす！」と笑顔でGSセンターから出ようとする学生。

——その瞬間、「…あ、今ちょうどチャイムになって人が多いからちょっと……出られないや」と、こぼす。私は苦笑いしながら「あ～タイミングがね、そうだね、ちょっと人が減ってからだねえ～？」と伝える。

——また時には、

「あ～1 階の誰でもトイレ埋まってたし、今ちょうど休憩時間で人が多いからトイレ行けないや～」という学生。私は「いや～本当にトイレ少ないし、行きづらいよね～。困ったもんだ」と返す。——

こんな風に、私たちの日常、そして現実は流れている。GSセンターの一步外では常に目には見えない何らかの微小で微細でマイクロなストレスがいたるところに転がっているのだろう。だけでももしかしたらほとんどの人は、「そんなこと気にしてたら生きてらんないよ～」と突っ込むくらいのことなのかもしれない。「さすがにそんな小さいことは、共感的に聞けないや～」と思うのかもしれない。

GSセンターで発せられる「声」は、何しろとっても小さい。もしかしたら声にすらなっていないときだってあるだろう。それはとても自分事で、主観で、かつ自分の経験であるからこそ、私たちの声はまるで、遙か彼方に既に消滅した星からやってくる光のように、気づいたときにはもう遅いということだってあり得るのかもしれない。私たちは、学習している。そんな小さな気持ちを吐き出していいのは、幼少期くらいだと。もっと言えば、吐き出していかどうかすら記憶の底にしまい込み、気づかないでサバイバル人もいるだろう。時にそれは「わがまま」なのだと呼ばれることもあつただろう。そして、いつしか私たちは、我慢しているのかどうかも麻痺させられる術を身に着けていくことが「普通」なのだと解釈していく。

だけど不思議と、このセンターには驚くほどに、この小さな気持ちを言葉にする機会に溢れている。誰もそれを「わがまま」だとは言わない。誰もあなたに対して責め立てない。

許されている。笑いあっている。泣きながら落ち着くことだってできる。このセンターの空気は、ほとんどいつも「小さな自分事」で充満していた。

そして驚くべきことに、それはいつしか、社会に対する眼差しを変え、自分自身を再占有し、己の怒りと悲しみに向き合い、行動に表出していた。そしてそれは、誰か一人の栄光や功績などではなく、「（他に人に指図や評価をされなくとも）存在すること自体が大事」ということを、この小さなセンターが遂行してきたからなのではないだろうか。

まぎれもない私自身が、小さな自分事を言い続け、そして私自身の主観を話し続け、自分自身の選択と経験を躊躇なくこのセンターで自己開示しようと決めたのは、どんなに訝しげな大人っぽい大人に対しても、それを止めないでいられたのは、何よりもこのセンターが「存在」しているからなのだと感じる。センターが「存在」していること、それはすべての始まりであり、在り続けることこそが、このセンターの意義であるときえ思う。

このセンターを作ったのは、実際にはプレゼンをした 2015 年の学生たちだ。もちろん実行に移した人々には最大限の努力に対しての労いと感謝、そして尊敬の念を送りたい。しかし、決してその人々が「偉い」からこのセンターが出来たわけでもない。きっとこれらの人々もまた、自分自身から湧き出る「小さな声」に耳を傾け続けてきたことで、プレゼンするに至ったのではなからうか。私たちは、これから、そしてこれまでの自分

の「小さな声」を、どれだけ聞き届けられていくのだろうか？それを無かったことにしてははいないだろうか？別に言葉にするほどのことではない、と思っははいないだろうか？

——小さな声を出し続ける小さなセンターは、日常に溶け込みながら、毎日小さな出来事を紡いでいる。

私たちには、「場所」が必要だと思う。そんな小さな声や、言葉にするほどのことでもないことを言葉にする場所——GS センターの存在は、早稲田大学の中で驚くほど小さい。その存在も、そしてそこに来てくれる人々の声も。そんな時、この「小さいセンター」に私たち職員は、学生は、教員は、そして大学は、どれだけ耳を傾けられるのだろうか？——それを考え続けることに、私はこの 5 年を費やし続けた日々だったように思う。

そして、私自身もこのセンターによって多くの自分の小さな声に耳を傾けることができた。このセンターには不思議な力と可能性が宿っている。そしてここで存在することが出来た自分を、何よりも誇りに思うことが出来た。関わってくれたすべての人やモノ、概念に、ありがとう。

私は物理的には所属しなくなりますが、きっと「概念」となって、GS センターの空気の中を漂い続けていきます (笑)

GS センター専門職員 大賀 一樹

「日本への再トランジション」

2021 年 5 月から週一回の非常勤専門職員として GS センターチームに加わりました。日本で生まれ育ったものの、高校卒業後からアメリカで過ごし、LGBTQ+ の有色人種のユースセンターにてセラピストとして働いてきた経験を日本で活かすことができるのか、若干の不安を持ったまま入職しました。その後すぐに、早稲田大学という国際的な環境において私がこれまで培ってきた経験や知識が役立つ場面は十分に存在すると分かりほっとしたものでした。

今後はこの「役に立たなければ意味がない」と思う自分自身の気持ちに振り回されることなく、過去の経験は今に、今の経験は未来にと、全て繋がっているのだということを忘れず、目の前のもの一つ一つに誠実に楽しみながら向き合っ活動していきたいと思っます。

GS センター専門職員 向坂 あかね

早稲田大学 GS センター活動報告書 第 5 号

2022 年 4 月 発行

編集・発行者 早稲田大学 GS センター

問い合わせ先 gscenter@list.waseda.jp

ホームページ <https://www.waseda.jp/inst/gscenter/>

無断コピーおよび無断転載を禁じます。コピー・転載・引用等される際には、
必ずメールにてご連絡いただきますようお願いいたします。
